

幸田文「鳩」の文体

一間接的に感情を表す感覚表現に注目して一

水藤 新子

【キーワード】 幸田文 感覚表現 感情表現 比喻表現 オノマトペ

1 はじめに

ある表現——音声でも文字でも様式は問わないが——に接し、私たちは何らかの感興を覚える。この場合、主題そのものに左右されるのは勿論だが、表現に負う面も少なくない。「何を」語るかと同様に「どのように」表すかによっても、受け手の印象は大きく変わってくる。表現は一見「結果」で、それ自体もう完成し、読み手が関わる余地はないように思われるが、それは表現主体側から見た場合であって、受容主体側から見れば「入口」であり、一語一句に接することで作品の全体像を理解し把握し、その目指すところ＝主題へと辿り着くことができるのだ。

筆者が研究課題としている幸田文(1904～1990)の文体は、しばしば「感覚的」と評される。何を根拠に読者はそう感じるのか、作品中の表現／言語使用を採り上げ、語学的な検証を進めている。これまでのところ五感の中の聴覚と触覚について、また比喻表現やオノマトペについて、幾つかの調査を行っている⁽¹⁾。

ただ一口に「感覚の表現」といっても、個々の表現を生み出すものは一様ではない。心地よい音があれば不快極まりない響きがあり、肌ざわりにも望ましいものと勘弁願いたいものとが存在する。こうした感覚は半ば先天的に決まっているようなものだが、その時々心理状態によって、同じものが快にも不快にも転ずる場合がある。例えばある人物について語るにしても、好感情を抱いているのと嫌悪感を覚えているのとでは、相当に表現が異なるはずだ。

前記の調査においては、「感覚」表現とはいずれもある感覚そのもの——音、肌ざわりなど——を描くことを直接の目的とした表現と見て、表現の根底にある快不快の感情については顧みなかった。本稿では基調となる感情が比較的わかりやすく一定している作品を採り上げ、その感情が感覚を通してどのように描かれるかを見ていきたい。

2 分析の対象

本稿で分析の対象とする作品「鳩」は、1950年1月1日発行の雑誌『新女苑』に掲載され、『黒い裾』に収録された。作者自身が結婚に敗れ、娘を連れて実家へ帰った頃の経験が創作（フィクション）として結実した作品である。

幸田文は随筆から出発した書き手であり、終生「私は玄人じゃない」と言い続けた⁽²⁾。確かに作品の多くが一人称小説（もしくは三人称であっても一人称的視点設定）であり、作品を通して主人公の感情の起伏は丁寧に、過不足なくなぞられていた。しかし本作品の場合、主人公は幸田作品の主流を成す作者自身の投影ではなく聾啞の少年である。また作品中では二人の主要人物の視点が交差する構成となっており、その点ではより創作的な作品と言えよう。

2.1 「鳩」における感情表現

この作品に現れた感情表現はのべ83例／異なり76例であった。内訳は以下の通りである⁽³⁾。

喜： 7/ 5 怒： 6/ 6 哀： 11/11 怖： 0/ 0 恥： 5/ 5
好： 7/ 6 厭： 36/32 昂： 5/ 5 安： 6/ 6

目を引くのは「厭」に関する表現の群を抜いた多さである。この作品は思春期にさしかかった聾啞の少年「倉」と、彼を疎ましく思う家政婦「スエ」との一種の“対決”がクライマックスに据えられている。お互い好意など持たず、むしろ警戒している間柄であり、「厭」まではいかずとも何らかのマイナス感情に裏打ちされた表現が出やすいことは想像に難くない。

但し感情というものは、いつも直接的に、いわば生の表現として出現するとは限らない。怒りや憎しみといったマイナス感情をあらわにするのは憚られるし、喜びや誇りといったプラス感情もあからさまに示すのははしたなく思われなくもない。一般的に悲しみは「胸が張り裂けそう」、嫌悪感「むかつく」、緊張や不安は「ドキドキ」等と表されるが、これらはすべて「感情」を「感覚」へ置き換えた表現である。本稿ではこの点に注目し、「鳩」という作品において感情を間接的に示す手段として用いられる感覚表現を対象に分析を進めていく。

2.2 「鳩」における感情を表す感覚表現

一般に「感覚表現」という用語は、感覚の言語化と、感覚的把握との両義で用いられている。前者はいわゆる五感——実際の身体感覚を言語化した表現であり（例「刺すような痛み」）、後者は心理状態や認識の対

象を感覚的に捉えた表現(例「心が痛む」)である。

上記の例はいずれも比喩表現だが、感覚的把握にはオノマトペを用いた表現も含まれる。痛みを例に採れば、「きりきり」なのか「じんじん」なのか、或いは「ずきずき」なのかによって、その「感じ」は全く別のものとなってくる。

また、共感覚表現⁽⁴⁾も忘れてはならない。これは「硬い声」のように、ある感覚を表すのに別のある感覚を表す語を借用してくる表現を指す。「硬い声」の場合、触覚を表す「硬い」が聴覚の領域に転移して用いられたと考えるものである。こうした感覚的転移には法則があり、たとえば「触覚→聴覚」の方向性は決まっていて、逆の転移はほぼあり得ないとされる。

本稿で分析対象とする感情を間接化する感覚表現は、上記のうち感覚的把握が主と予測されるが、調査に当たっては「鳩」に出現する感覚表現すべての用例を収集し、分析を加えることとした。但し共感覚表現は「共感覚メタファ」「共感覚比喩」とも呼ばれ、比喩表現の一種と見なされることから、ここでも比喩表現の下位分類として扱うこととする。

テキストは岩波書店刊『幸田文全集』第二巻を用いた。なお、引用文の表記については原則として現代仮名遣いとし、常用漢字については新字体に改めた。

3 「鳩」に見られる「マイナス表現」の諸相

「鳩」に出現する感覚表現は、のべ 181 例／異なり 171 例に上った。うち、マイナスの感情(怒・哀・怖・恥・厭)に関連した、「負」の印象を与える表現(以下、「マイナス表現」とする)は 34 例／31 例に止まったが、これはそれぞれ全体の 18.8%／18.1%に過ぎない。

3.1 オノマトペ

本稿ではいわゆる擬音(声)語・擬態語を広くオノマトペと一括し、品詞の違いについては問わないものとする。オノマトペを用いた表現は 101 例／92 例、うち「マイナス表現」は 14 例／12 例で、それぞれ全体の 13.9%／13.0%に当たる。

- 1 そうと知りつつうっかりしていれば、(鳩や雀の糞を) びしゃつと肩さきへかけられる。[354 頁-7 行]
- 2 雨の日などは頭の上の梁から、むうつと鳥臭さ糞臭さがぶらさがっているような気がする。[354-7~8]

1の「びしゃつ」は液体が勢いよく撥ねかかるさま、2の「むうつ」は臭気や熱気が迫って来るさま、ともに不快感を示すことは一目でわかる。

さらに双方とも末尾に促音を足すことで、その程度が軽いものではないことが示される。

3 鳩の見たさは格別だった。が、スエのぺとりと冷たい手をおもえば、たまったものじゃない。[367-2~3]

4 なんとちゃらちゃらとやっているのだろう。(略)ただ彼等(土鳩のつがい)はちゃらちゃらと満足しあっていた。

[359-15~360-2]

3の「ぺとり」は湿り気を持つものが貼り付く感じを与える。冷たく湿った手で触れられる不快感を端的に表している。また、4では浮ついて実のない感じの「ちゃらちゃら」を用いて、楽しそうではあるがやや侮蔑を込めた評価を述べている。

ここまではいずれも常識的な用法だが、この書き手の持ち味はむしろ以下のような、どちらかといえば非常識な用法にあると言えよう。

5 (スエは)きゅうと赤い唇のはしを吊りあげて、いやな笑いかたをする。それを見ると絵にある般若の牙の口を聯想させられ、しかもその唇を倉のほうへぐいとしゃくって、連れの人などへ何かあきらかに倉のことをしゃべってばくばくさせたりすると、ぞっとした。[361-10~13]

「きゅう」は何か曲がる、持ち上がるさまで、ここでは「唇のはし」が笑みにまくれ上がる様子に当てられている。これだけで特定の感情を示すものではないが、直後に「いやな笑い方」とあることで不快の表現と認識される。

6 口数を利けば利くほどわれからむしゃむしゃして来る。

[364-4~5]

「むしゃむしゃ」は何か食べるさまを転用したように見受けられるが、ここでは「むしゃくしゃ」からの連想で用いられているとするのが妥当だろう。

7 倉が遂に睨み負け、べそかきづらからぎらぎらするような憤怒を見せて、半袖から突き出た腕にぼつぼつとできている何やらおできの瘡ぶたを、めりっと剥がして口に入れ、めりっと剥がして口に入れ、おできからは順々に血膿が流れ出した。[372-4~6]

「ぎらぎら」は清音の「きらきら」に較べどぎつさが増す。ここで注意すべきは「ぎらぎら」が直接「憤怒」にかかっている点である。怒りや恨みを帯びた眼の色を表す例はよく見かけ、これもその箇所が省略されていると考えてもよいのかもしれないが、むしろここでは眼という「点」に留まらず、顔全体という「面」に満ちた負の感情を強調した表現になっていると考えたい。

さらにおできの瘡蓋を剥がすさまに「めりっ」があてられているのも斬新ではないか。立ち木が軋みつつ倒れるさまや、家鳴りなどを表す音だが、ここではある種の抵抗感を示すものとして用いられている。擬音語を擬態語に転用することで、本来剥がすものではない瘡蓋を無理矢理剥がす、その痛みまでもが伝わってくるかのようだ。

8 ごみごみしたもののの一つもない、雲と風ばかりの澄んだ天

[360-4]

どこまでも晴れて、見上げる者の気持ちも軽くするような空の様子である。「広々とした」でもよさそうだが、対義的な「ごみごみ」を選択しておいて打ち消すことで、語られる空の素晴らしさ、その解放感のほどが窺われる表現となっている。

9 そこまで来ると、きらつとした。[351-1]

10 (スカート)のゆるやかな紺の襷がふわりと広がって、清潔な下着につつまれた股がぎらつと光った。[373-4]

9はこの作品の書き出しである。「そこ」はある家の前で、「きらつ」としたのは鳩舎の金網だ。何度か通りかかっているが気付いていなかったのに、ある日不意に目に留まって以来、「倉」は足繁くその家へ通うようになる。片や 10 は結末に現れる。仔犬が車に轢かれ、その脇にしゃがみ込んだ女の子の下肢の白さが、「倉」の視野に眩いばかりに飛び込んだ瞬間である。「清潔」さを「ぎらつ」と捉えるのには違和感を覚えるが、これは「倉」の受けた衝撃を表すものであり、少女の「股」が実際に光を放つわけではない。あくまで「倉」の主観を写し取った語であり、内面の言語化が行われたものなのだ。

オノマトペは原則として、清音よりも濁音を用いた方が重くて大きなものを連想させる。「きらつ」と「ぎらつ」を比較した場合、濁音化した後者の方がどぎつく生々しい印象を与える。冒頭、思いがけない楽しみを見つけて湧き立った同じ心が、唐突な性の目覚めに揺さぶられて終わっている。類義のオノマトペを配しているが明らかな対比も見受けられ、何か不吉なものを残す役割を果たしているのだ。オノマトペの特性を最大限に利用した表現であり、単なる素人が思い付きで書いたとは思えない。読み手の感覚に直に訴えかける、実に意欲的な象徴表現と捉えたい。

3.2 比喩表現

比喩表現は 80 例／79 例あり、うち「マイナス表現」は 20 例／19 例で、それぞれ全体の 25％／24.1％に相当する。

3.2.1 直喩・隠喩

次項で扱う共感覚表現に対し、一般的な比喩表現という意味合いで、直喩・隠喩の項を設ける。

- 11 しばらく立っていたが鉄網は夕焼けの空を亀の子形に透かせて、すんとしていたし、堀も堀についた潜りも倉の好奇心をことわるように、すげなく落ちついていた。 [351-4~6]

直喩は一目で比喩とわかる言語形式を伴う。「まるで」「ような」「みたいな」等が一般的だが、「亀の子形」の「形」もこの形式に類するものと見做してよいだろう。

「堀」「潜り」が「ことわ」ったり「落ち着いていた」りする、というのは、無生物・非情物が生物であるかのように扱われる活喩である。ここでは人の態度を示す「すげなく」が添えられているので、活喩の中でも特に人になぞらえた擬人法となっている。

- 12 雨の日などは頭の上の梁から、むうつと鳥臭さ糞臭さがぶらさがっているような気がする。 [354-7~8]

隠喩は喩詞（たとえるもの）と被喩詞（たとえられるもの）とが直接結び付けられた比喩であり、一見してわかるような言語形式を伴わない。ここでは「鳥臭さ糞臭さ」と重ねて、さらにそれが「ぶらさがっている」という。不快な臭気は周りの空気より比重の高い印象だが、それがちょうど鼻の高さに淀んでいるかのような生々しさだ。

- 13 例の唇ががごと裂けて無遠慮に笑った。まっ白な歯が犬や猫のように揃っていた。 [362-8]

5で唇の端を「きゅう」と上げて笑った「スエ」の、今度はもっとはっきりした笑顔だ。「口を開けて」ならただの描写だが、「がごと裂ける」唇は見る者を怖じ気付かせる。白い歯は賞賛されるはずが、「犬や猫のように揃ってい」るのは人間に不似合いな鋭さを連想させて美しくない。「倉」が「スエ」をどのように見ているかが、余すところなく伝わってくる場面である。

- 14 音という音が皆ふさがっているというわけではなかろうとおもえるのだが、 [352-2]

「倉」は聾啞者である。「音が聞えない」ならごく常識的だし、「耳がふさがっている」ならば俗語的な言い方になるところを、音「そのもの」がふさがっているとするのは、障害の程度をより際立たせる残酷さだ。

- 15 それ以外にからだの外へ絞れ出る声といえ、ウウと云うだけ。 [352-10]

- 16 耳と口は縛られていたが、眼と手足は勝手だったから、どこへ

でも出かけて行き、何にでも触ってみ、なんでも見歩くことが倉の楽しい日課といえた。[352-15~353-1]

14 に類する表現として、15 ではやっとのことで声を出すさまを「絞れ出る」とする。声を「絞り出す」であればごく一般的だが、自発的に「出す」のではなく「出る」とするだけで、目に新しい表現となる。また 16 では同様の不自由さを「縛られている」としているが、「眼と手足は勝手」と続けて「楽しい」へと繋がるので、15 に較べれば救いのある表現となっている。

17 凝然とした真昼が、ものの影を短く黒く地に浸みつけてい、女の子が玄關と勝手口の堺の植込に、口を結んでいた。[372-6~7]

「凝然」はじっとして動かないことである。その場から動かないのは「真昼」そのものではなく南中時の太陽だ。それが放つ強い光でできた影の濃さは、しばしば「焼き付ける」と表現される。「浸みつけ」るは内部まで入り込む感じとなり、表面的なものに留まらない、よりくつきりと存在感のある暗がりを感じさせるのではないか。

18 さげすみの薄ら笑いを受けなくてはならない不具の負う十字架。[361-8]

「十字架」は一生背負わねばならない何かの例えで、特に珍しい表現ではないが、ここでは周囲から受ける憐憫や侮蔑といった謂れのない差別をさす。本来は重い罪を象徴する語だろうが、豊唾であること自体は勿論罪などではなく、あからさまな憫笑を浮かべる周囲の人間の方がよほど罪深い。不具者とは、そうした人の気持ちの貧しさを計る役目を天から仰せつかった者とも解釈するならば、彼らの抱える障害はより苛酷さを増す。

一見手垢の付いた陳腐な比喩だが、この書き手の場合共起する語句の選択に個性がある。ありふれた言い回しが活性化させられている一例であろう。

19 かつての日、田舎の圧制に苦しめられた経験が、つぎつぎとスエの胸を掠める。[368-9]

小さな村落共同体の、近隣の目を気にする生活や細かなルールを思い出している場面である。「圧制」は 18 と同じく陳腐且つ大袈裟に思えるが、「束縛」と言っただけでは足りない不自由さを窺わせるには十分だろう。

20 その子がよその子と違ってなにか不幸の影を持っていることは、説明なしに感じとって、はかなげにかわいく、頼りなげに楽しくて、友だちになりたいと思った。[358-4~6]

「不幸の影」は「持つ」より「さしている」ものではないだろうか。

この女の子の両親は離婚し、その結果母親と二人でその実家に身を寄せている。自分の意思とは関係なくもたらされてしまった悲劇だが、外的経験が内面に少なからぬ変化を及ぼすことは想像に難くない。この「影」は一方的に落とされるものではなく、内側からも滲み出していたのだと思えば、「持っている」としたのは慧眼かもしれない。

3.2.2 共感覚表現

いわゆる共感覚表現は 18 例あり、うち 9 例が「マイナス表現」であった。オノマトペとの併用も見られ、再考を要する。

- 21 スエは倉とほぼ同じ、あるいは少し低いかもしれない背丈だったが、肩も胴も重そうに厚くできていて、近寄って来られるとそこいら中から生暖かい妙な圧迫が襲って来る。[361-14~15]

身体つきをさして「厚い」というのはごく一般的だが、そこに「重そうに」が加わると実感が増す。厚みのあるものは大抵重みもあることを思い出す、とでも言えばよいのだろうか。そのような人物が近付けば圧迫を覚えるのも当然だが、さらに「生暖かい」と加えることで、存在感のある若い肉体が発散する体温をも感じさせる、より生々しい表現となっている。

- 22 忌々しさをつつんでスエは、不動様に見たてられたように祈願をうけなければならなかった。[365-13~14]

表に出してはならない感情はしばしば心の奥へとしまわれる。本音を口に出す際に「包み隠さず」と形容されるのも同じ発想だろうが、抽象的な感情を具体的な物であるかのように扱う点で、ごく日常的な共感覚表現である。

- 23 神妙さが剥がれると地金の、不具のあまやかされた勝手が出る。
[369-15~370-1]

「地金」は隠していた本性をさし、こちらもごく慣用的な表現と思われる。ただ直前に「神妙さがはがれる」とあるのは、地金の原義である「めっきの土台」から連想された動詞であり、22 と同じく抽象を具象扱いしたものである。

- 24 他人の子ながら不具への思いやりが親爺の顔に光っていた。
[356-6]

- 25 繊細な技巧をとまなう愛情の底光りにとらえられたのかもしれない、[366-14]

ともに、ある種の感情が「光」になぞらえられている。24 では「思いやり」、25 では「愛情」で、いずれも本稿で取り上げるマイナスのカテゴリーに属するものではないが、人は本能的に闇よりも光に惹か

れるものであることを思えば、この連想はごく自然であろう。24 のようにただ「光」と捉えたものは慣用的とも思えるが、25 では「底光り」とある。浮わついたり表面的だったりにない、重みも深みも備えた本物の感情を想起させる。

26 うそだかほんとだか、鸚鵡の舌は棒状だという。倉のは茶筌のような形ではなかろうか。ことばとも云え声とも云えるものながら、その音はいっぱいに生えたのぎとか、しらが大王とかいう毛虫とかを感じさせる不気味さをもつものだった。 [371-12~15]

「のぎ」は「芒」と書き、稲や麦などイネ科の植物の実が外殻に持つ針のような毛のことだ。細かなものがびっしりと蒔いているさまは、確かにある種生理的な気持ち悪さを覚えさせる。蟹の「倉」が発する声＝「音」をさして、このように視覚的な、また触覚（皮膚感覚）的な捉え方をしている点がおもしろい。

また、毛虫という生き物は大概嫌われているものの、その理由まで考えることなどなかなかないが、要するにあの外見が上記のような不快感へ繋がるせいだと気付かされる。好悪の感情という非論理的なものが、ある意味で論理的に冷静に説かれているわけで、その点からいっても非常に個性的な表現と思われる。

27 倉はごつんとしている。／「強情っぱりめ。」 [371-3~4]

「強情っぱり」なさまをさして「ごつん」と評している。重くて硬いもの、石のようなもの、またはそれがぶつかる音だ。柔軟なところがなく素直でなく、ともすれば自分からぶつかって、相手に対して痛みを与えかねないようなあり方だ。

28 すすきの葉っぱは細いけれど、さあつと人を切る、そんな眼だった。 [365-10~11]

「すすきの葉っぱのような目」だったら一重の切れ長な瞳を連想するが、それは形状しか伝えない。あの細いしなやかな葉が、何かのはずみで鋭利な刃物に匹敵するような仇をなすことがある。それは一瞬のことで、まさに「さあつと」行き過ぎる間になされることだ。このような目で見られたならば、大人しく見えても決して従順なばかりではないとの用心を覚えさせられるだろう。

27・28 ともにことばを尽くして表現するのではなく、ごく短い一語のオノマトペを用いている。伝えたいことがあるならきちんと説明すべきだが、長く語ればよいというわけでもない。俗な印象を与えはしても、読み手の経験と照らし合わせて直感的に伝わるものが多いオノマトペは、こうした表現で大いに効果を発揮するのではないか。

4 まとめと今後の課題

「鳩」における「感情」表現と「感覚」表現との相関は、作品の主題を考えれば随分と低いものであった。しかしこの結果は全くの予想外かと言えば実はそうでもない。何故ならこの作品の読後感について言えば、「厭」という印象はあまり強くないのである。むしろ「倉」の鳩への関心、その裏にある少女への関心が隠れた主題であって、それは「倉」自身にもまだ自覚されない性の目覚めを暗示して終わる。それを妨げるもの＝「スエ」への憎しみの感情は確かに表れるが、全体としては鳩への、そして少女への好感が目につくのだ。

数値的な面について補足するなら、「倉」に対する「スエ」の不興が作品中盤からしばしば表出されるために、作品全体としても「マイナス表現」が増加している。複数の人物の感情が交錯するために前記のような予測とずれた結果が生じたわけで、登場人物ごとに整理し直さねばならない。また「スエ」は、「倉」に対して部分的にはかつての自分を重ねるような、憐憫とも呼べるような感情も抱いている。こうした嫌悪だけではなく複雑な感情のあり方についても、再考が必要だろう。

「倉」自身は聾啞ということもあって、外界に対しても自分自身の内面についても、その認識はごくぼんやりとしていて頼りなく感じられるのだが、実際は見た目ほど愚鈍なわけではない。周囲の誰が関心を払うわけではなく、「倉」自身無自覚な感情の揺れ動きを丹念に辿ることで、結末の効果――不意に訪れた性の目覚めの暗示が読み手に残す、何とも不安な印象も際立つだろう。

となれば尚のこと、ライト・モチーフや伏線といった、より大きな、しかしながら表向き隠れた項目に目を向ける必要がある。その点でも、共感覚表現のような象徴性の高い表現は注目に値すると思われる。ただ、感覚的把握と共感覚表現とは、分類にあたってしばしば混乱をきたす。これまでに採った用例についても、再考の余地は大いにあるだろう。そのためにも「感覚」表現という括りをできるだけ広げて、語種、語の位相、用語・用字等々より広い範囲で、さらなる調査を行っている。

今後も幸田文の作品を主な研究課題とすることには変わりはないが、それ以外の作家についても調査の幅を広げてできるだけ多くのデータを集め、日本語の小説における、主題と感覚表現及び感情表現との相関を検証したい。

【注】

- (1) 以下、小説の感覚表現を主題とした論考である。
「幸田文の音表現—『台所のおと』を対象として—」(森田良行教授古稀記念論文集『日本語研究と日本語教育』明治書院(1999))
「幸田文の感覚表現—『肌ざわり』の描写を対象に一」(『国語学 研究と資料』第23号)(2000.1)
「『感覚的』文体試論—『段』を対象に一」(『相模女子大学紀要』Vol.65 A)(2003.3)
「幸田文の文体—『感覚性』を支える文構成—」(『表現と文体』明治書院(2005))
- (2) 岩波版全集「月報8」 青木玉による談話「おぼえていること(一)」参照
- (3) 中村明(1979)参照
- (4) 中村明(1977)「第2部 比喩表現の分類」参照

【参考文献】

- 浅野鶴子編(1978)『擬音語・擬態語辞典』角川書店
阿刀田稔子・星野和子(1995)『擬音語・擬態語使い方辞典』創拓社
天沼寧編(1974)『擬音語・擬態語辞典』東京堂出版
池上嘉彦(1975)『意味論』大修館書店
磯貝英夫(1970)「近代文体と対峙する古典的語体文—幸田文—」(『文学論と文体論』明治書院)
市川孝(1963)「幸田文の文体」(『講座現代語5』)明治書院
金井景子・小林裕子・佐藤健一・藤本寿彦編(1998)『幸田文の世界』翰林書房
小島孝三郎(1972)『現代文学とオノマトペ』桜楓社
飛田良文・浅田秀子(2002)『現代擬音語擬態語用法辞典』東京堂出版
中村明(1977)『比喩表現の理論と分類』(国立国語研究所報告57)秀英出版
中村明(1977/1995)『比喩表現辞典』角川書店
中村明(1979)『感情表現辞典』六興出版(後に中村明編(1993)『感情表現辞典』東京堂出版へ)
中村明(1991)『日本語レトリックの体系—文体のなかにある表現技法のひろがり』岩波書店
中村明編(1993)『感覚表現辞典』東京堂出版
山口仲美監修(2003)『暮らしのことば 擬音・擬態語辞典』講談社